

第9回

湯崎知事と 「ひろしまの未来を語る」 (尾道市)

と き 令和3年4月26日(月)

ところ 尾道市役所 4階大会議室

目次頁

開会	2
知事ビジョン説明	2
参加者①	6
参加者②	7
参加者③	8
参加者④	9
参加者⑤	10
市長コメント	14
フリートーク	15
閉会	18

広島県

開 会

- 司 会： 皆様、お待たせしました。ただいまから「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」意見交換会「ひろしまの未来を語る in 尾道」を開催いたします。
- はじめに本日御参加の皆さんを紹介いたします。湯崎知事の左手側から大橋和也さんです、佐々木真理さんです、小林亮大さんです、中本悠哉さんです、酒井裕次さんです。
- また本日は尾道市市長、平谷祐宏様にも御出席いただいております。
- また広島県議会議員、高山博州様、金口巖様、吉井清介様、お三方にも御出席いただいております。お忙しい中、誠にありがとうございます。
- この会の模様はYouTubeでライブ配信を行っております。
- 通信回線の状況によっては画像が乱れることもありますので御承知ください。
- また県のフェイスブックを通じてライブ配信を御覧の皆様からの、御意見や感想を募集しておりますので、フェイスブックを御利用の皆様は、ぜひ広島県の公式アカウントにコメントをいただければと思います。

意見交換

- 司 会： 続きまして、本日の意見交換会のテーマでございます。「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」の説明、その後意見交換に入ります。ここからは湯崎知事に進行役をお願いいたします。
- 湯 崎 知 事： 皆様こんばんは。今日は皆様大変お忙しい中、こうやって御参加をいただきまして、ありがとうございます。
- 今日は本当に尾道の景色を楽しむには最高の時間帯で、暮れ行く夕日も見ながら、素敵な時間を送ることができるのではないかと、そんな予感がいたします。
- 今日は先ほどテーマの紹介がありましたが、広島県では10年後の目指す姿、そしてその実現の方向性を示した新たなビジョンを策定しました。これは県の総合計画であり、我々はビジョンと呼んでおります。「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」でございます。
- これは昨年の10月に策定したのですが、今年度から実行の年、これから10年間となっています。
- このビジョンによる新たな広島県づくりを、県民の皆様と一緒に進めていきたいと考えておりまして、そのためには皆様に、ビジョンについて御理解をいただきたいということと同時に、県民の皆様からも御意見をいろいろとお伺いして、意見交換をさせていただいて、今後の施策展開につなげていきたいと考えておりまして、今日の会、これは今23市町を回っているのですが、その一環として開催をさせていただいているところです。
- ビジョンの中身を最初に簡単に、私から説明をさせていただきたいと思っております。
- スクリーンを御覧いただければと思いますが、まずこのビジョンの背景といたしまして、人口減少とか高齢化、少子化、今年から新しいビジョンが始まっているのですが、その前の10年間のビジョンがございました。
- その中でも少子化とか高齢化とか、あるいはもちろん人口減少というのは、大きな構造変化としてしっかりと対応しなければいけないと定めていたのですが、当時は、10年前に作ったときは、これから人口減少進むよというところでしたが、今や人口減少は現実化して、予想どおり減少しているのですが、1年間に1万人ぐらい減っていく状況になってきています。
- グローバル社会もますます進展をしておりますし、デジタル技術、これが急速に我々の社会に入ってきているということがございます。
- コロナで明らかになってきましたが格差社会、コロナでも格差が拡大し、その前から格差もあったということが浮き彫りになってきていたりとか、尾道も経験しましたが大規模災害、これは頻発している、あるいはもちろん足元の困難期、先行きが見えにくい不透明な、こんな状況があるということ、まず背景としております。
- そこをどういうふうに我々は乗り切っていくのかということが、このビジョンになっているわけです。
- それでビジョン自体は、30年後にどんな姿を目指すのかということ、これをまず考えまし

て、30年後というのはあまりにも遠くて、30年前に今の具体的なこの状況を誰も想像できないと思うのです。

それなので少し抽象的に30年後はこういうふうになりたいよねというのを考えまして、それをそこに至るまでに、今から10年後はどうなっていないといけないのかというのを具体的に作っていきました。

それではその10年後の目指す姿にたどり着くためには、どんなことをしなくてはいけないのかというのが、このビジョンになっているということです。

基本理念としては、将来にわたって「広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かった」と思える広島県の実現なのですが、10年後に目指す姿としては、これはやや抽象的ではありますが、県民一人一人が「安心」の土台と「誇り」により、夢や希望に「挑戦」している。

そして、「安心」「誇り」それが原動力となって、県民の皆さん一人一人が持っている、こういうふうになりたい、ああいうふうになりたい、こうなりたい、ああなりたい、そういう夢が、あるいは希望に挑戦して元気でいられる、そういう姿を目指したいと思っています。

仕事も暮らしも。里もまちも。それぞれの欲張りなライフスタイルの実現とありますが、仕事も暮らしも、それぞれの欲張りなライフスタイルの実現というのを、前のビジョンでも言っていて、それはどういうことかという、よくワークライフバランスといわれますが、日本の場合これまで働き過ぎだったので、ちょっと働くのをもう一回考え直して、そしてライフのほう、ここを充実させるべきではないかという考え方で、6割仕事、4割ライフだったのを、5割仕事、5割ライフにしようとか、そういう感覚。

つまり、足して100というのが一般的に受け止められていることなのですが、広島県の場合は足して100ではなくて、仕事60、暮らし40だったら、仕事60、暮らし60にして120にすればいいじゃないかと、そういうことを言っていて、それなので欲張りといっているわけです。ただ人間、1日に24時間しか時間はありませんから、それを実現するためには、いろいろなことをやっつけていかなければいけないということで、それではどうするのかということが前のビジョンにもあったわけですが、それは引き継いでおりまして、そういった欲張りなライフスタイルを目指していきたい。

そして里もまちもというのは、これは田舎だけいいとか都市部だけいいとかということではなくて、どこに住んでいても、またそれが実現できるといったことを目指していこうというものです。

ビジョンのポイントとしまして今申し上げた、「安心」「誇り」それを土台として、夢や希望に「挑戦」というのがありますが、もう二つありまして、「適散・適集社会」のフロントランナー、これはまた後で御説明しますが、適散・適集というのは、適切な分散と適切な集中です。

これはポストコロナの時代に求められる、あるいは実はグローバルには、そういったことが目指されている、そういう状態ではないかなと思っておりまして、日本社会でこういったことを実現していかなければいけないし、広島は実はそれに非常に適したところではないかと考えているところです。これがポイントの一つ。

もう一つは、全ての施策を貫く3つの視点というのがありまして、一つはデジタルトランスフォーメーションの推進、それからひろしまブランドの強化、そして生涯にわたる人材育成、こういった視点を全ての施策に貫いていこうとなっています。

「安心」の土台と「誇り」の高まりという部分ですが、今の時代、非常に皆さん不安を抱えているのが多いのです。

これは調べると、広島県の今の暮らしに満足ですかというのは結構高い割合で、しかも年々高くなっている状況がありますが、ただそこに同時に不安がたくさんあるというのもあるのです。

これは寿命が長くなって健康どうなるのだろうか、あるいは年金とか、年を重ねてからの暮らしが、お金はどうなるのだろうか、医療受けられるのだろうかとか、あるいは所得の格差、こういったことが心配の種になっているわけですが、こういった不安をまず軽減して、安心につなげていくことが大事だろうということで、それを実現していくためには、イノベーションと言っていますが、いろいろな工夫をして、不安な要素そのものを取り除いていったりとか、あるいはセーフティーネットをしっかり構築して、何かあってもきちんと支えてもらえるといった安心感、そういったも

のを作っていく必要があると思っています。

その上で、広島にはいろいろな素晴らしいものがありますよね。

それが我々の誇りにつながっていると思いますが、その誇りを更に磨いていく、あるいは高めていく、それによって「よし」と何か頑張ろうという気持ちになっていく。

そういったことを土台として作る必要があるだろうと、その上で挑戦を、投資をしていくというか、県民の皆さんの挑戦が、これはどういうものかという、これに書いてあるように、それぞれが持っていらっしゃる夢だとか希望だとか、それを実現しようという気持ち、一歩前に出ていくという。

それが挑戦なわけですが、それをできるように行政として、後押しをしていこうということでもあります。

それが結局、欲張りなライフスタイル、先ほど申し上げたようなものにつながっていくと考えているところであります。

それから里もまちもというところは地域的なもの、地域政策のことだけを言っているわけではないのですが、例えば広島市だとか福山市のような県全体をけん引するような都市部、これも更に活気をもたらすということを進めていく必要がありますし、一方で非常に自然が豊かな中山間地域と呼ばれる地域、ここもすごく価値があるので、それがしっかりと持続可能なように、元気が出るようにしていかなければいけない。

そしてまた多くの人々が住んでいる尾道のようなまち、コンパクトで便利なまち、そして暮らしやすい、そういったまちもしっかりと支えていく発展していく、そういうことは必要だろうということで、広島ではどこに住んでいても、そういった希望だとか夢に向かって挑戦できる、そういう地域を作っていこうということでもあります。

それから「適散・適集社会」というのは、これはコロナで気付いたことというのは、たくさんあるわけです。

例えば、これまで特に日本の場合、東京だとかまちに向かってエネルギーを集めていたわけです。

いわゆる三密、密集・密閉・密接、これいわば大都会のビルの典型みたいなものじゃないですか、全部一つの狭い空間にいっぱい人を入れて、このビル一本に4,000人いますとか、6,000人いますとかたくさん作って、これでどうだ生産性が高くなるだろうということをやっていたわけですが、それが本当に、まず第一すごくリスクがあるのではないかと。

こういう感染症だとかパンデミックに非常に弱いし、これは地震があったら40階の建物にいる人、降りてくることができない、トイレもできない一体どうするのだといったことだとか、非常にリスクもあることが改めて認識をされてきました。

また、デジタルも遅れているということがよく分かってきたのですが、こういうコロナによって気付いたことっていろいろとあるのです。

それでは次の時代はどうなるのかと考えると、どんどん密集・密接・密閉を高めていくということではなくて、実は開放的で快適な環境がより人間らしいし、いろいろなリスクにも強いのではないかとというのがあつた。

それからそんなに密にならなくても、今やデジタルを使えば離れたところでも、コミュニケーション図れるし仕事もできる。

いろいろな時間的な、あるいは空間的な制約を乗り越えることができるのではないかとということが分かってきた。

一方でリアルに顔を合わせることも大事なことですよね。

それがあつていろいろな知が生まれていく、雑談から生まれるアイディアとか、そういったことも含めて重要だよね。

要するにどちらも過度なものがよくないのだろうと、過度な密集とか、過度な疎というものが過疎なわけですが、そうではなくて適切な集中だとか適切な分散、こういったものが重要だろうということで、「適散・適集社会」を目指していこうと掲げております。

実は広島はよく見ると「適散・適集社会」すごく環境整っているのではないかと、まちのすぐ側には自然豊かな地域がありますし、そういったところをデジタルをもっと活用できるようにしてつないでいくとか、まち自体もそこまで過密でもない、そういうまちでありますので、この新しい時代における「適散・適集社会」それが求められて

いる、そのフロントランナーに広島なれるのではないかといいておられます。

それから施策を貫く3つの視点というのがありました、一つはDXの推進、デジタルトランスフォーメーションの推進、デジタル技術をうまく使っていこうということです。

デジタルはあなたが嫌でもやって来るということで、やって来るのであれば、いかにそれを活用してそこから価値を生んでいくか、デジタルをまずうまく活用して、うまくいろいろな生産性を高めるとか、付加価値を生んでいくとかというのが必要ですが、そのときにも東京の人がいっぱいやって来て、デジタル部分を担っているということになると、そこで価値がどんどん逃げていきますので、我々自身がやるといったことを、目指す必要があるのではないかと、あらゆる分野でデジタルを活用していくことが重要だということ。

それから先ほどの誇りにも関わってきますが、ひろしまブランドの強化をしていく。

広島の強みってなんだ、それがより認識をして磨いていくことによって、我々自身の誇りも高まっていくし、その強みが更に磨かれて、更に強くなっていく、そしていろいろな人の共感を得ていくことができると思っています。

それから全てそういったものを支えるのは人材でありますので、また人生、今100年時代といわれる中で、いろいろな人生のステージの中で役割が変わったり、いろいろとしていきます。

そういう中で生涯にわたって学んでいく、学び続けることができる、そういう人材育成、そういうことを進めていく必要があるのではないかと、これもあらゆる分野で、これが必要だろうと考えています。

具体的な施策領域を17ほど定めています。

これらそれぞれ相互につながっていると思っていますが、それぞれの分野でいろいろな目標値を立てています。

具体的に子供・子育てのところで見てみますと、子供・子育ての中にもいろいろとあるのですが、例えば、全ての家庭を妊娠期から子育て期まで切れ間なく見守り、支援するネウボラの拠点が全市町に設置されている、ということで今ネウボラというのを順次進めていて、尾道市も取り組んでいただいています、これが全市町に展開されているということを目指す姿にしまして、その目指すべき指標としては、安心して妊娠、出産、子育てができると思う人が今80パーセントぐらいなのですが、それを9割以上に持っていこうといった目標として定めているわけです。

それに関わる、いわゆるKPIと呼ばれるような我々が追いかけていく指標、これもここにあるようにいろいろと定めていまして、そしてそれを実現する取組の方向として、妊娠期から切れ目のない見守り、支援の充実を目指そうとか、あるいは子供の居場所を充実させていこうとか、こういったことを定めているわけです。

これが各分野ありまして、教育では例えば今我々が進めています「学びの変革」が定着しているということです。

それでそれぞれ指標がまたある、取組の方向があるというようなこと。

あるいは観光を見ますと「ひろしまブランド」や「瀬戸内ブランド」の認知が高まっているということを目指して、指標としては観光消費額、令和元年が4,410億だったのが、令和12年には8,000億円になるといったこと、こういったことを定めているところです。

以上が概略ですが、最後、県内のどこに住んでいても、皆様お一人お一人が、夢や希望に挑戦できる広島県づくりを推進しようとなっているのですが、このビジョンを実現するのは実は県民の皆様なのです。

これは行政ではない、行政はあくまでも支え役というか推進役というか、旗振り役だったり、そういう役割だと思っています。

というのは経済で考えても、広島県11兆円ぐらい、いわゆる県内総生産ありますが、行政がこの県内総生産作るわけではないのです。

これは県民の皆様、お一人お一人が働いて、企業が活動して、11兆円の県内総生産生んでいるわけですが、これを伸ばそうと思ったら、行政が頑張っても伸びるわけではなくて、事業者の皆さんが頑張ったら伸びるわけです。

だから行政はそれができるような環境づくりだとか、後押しだとかそういったこと

をするのが役割なのですが、これは医療にしても福祉にしても、あらゆる分野で実際に担っておられるのは県民の皆様。

これは事業者や個人も含まれますが、それなので皆様自身がまさに挑戦する、その一つ一つが積み重なって、このビジョンは達成する。

あるいはよりよい広島県が実現するというので、まさにみんなで実現していきたいというものでございます。

そのためにこういった会を催させていただいているところでございますので、何卒よろしく願いをいたします。

ありがとうございました。

それでは続いて、意見交換に進めさせていただきたいと思います。

初めに御参加いただきました皆様から5分ずつぐらい御意見、御提案をお伺いしたいと思います。

皆様の御発言、一巡したところで、残りの時間で全員での意見交換をさせていただきたいと思いますので、よろしく願いをいたします。

発言の順番は既にお願いをしていると思いますので、その順番にしたがって御指名をさせていただきます。

御発言は座ったままをお願いいたします。

それではまず、はじめに大橋さんからお願いできますでしょうか。

参加者①

大 橋： ありがとうございます。

はじめまして、自分は現在、尾道市北部の御調町におきまして地域おこし協力隊として活動しています、大橋和也と申します。今日はよろしく願いいたします。

また新型コロナウイルスの感染症対応であったり、昨日は選挙であったり大変お忙しい中、改めてこのような貴重な会を設けていただき、ありがとうございます。

私は昨年春に入籍を期に関東から移住をしました。

町内では主に農業活動や食に携わる関連団体の企業と振興活動をしています。

今回は国内外での経験だったり、僕も移住者という一つの目線でお話できればと思います。

前職は茨城県の農業学校の職員であったこともあるので、農業も含めた一次産業の分野からお話させていただきたいと思っています。

またこの度、参加するにあたって「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」読ませていただきました。ありがとうございます。個人的にとっても興味深い内容に感じました。

現在のコロナ禍と呼ばれる状況で、適散・適集というビジョン、考え方は僕自身もあまりなかったもので、尾道はそういう点で、里山であったり里海、またこういう市街地があったりと、尾道一つ見ても適散・適集的な視野のあるまちと感じます。

その上で今回、提言というか意見という形で、施策のテーマとしてやはり自分自身、今、主に携わっている農林水産業に関して、少しお話をさせていただきたいと思っています。

第二章の施策領域に関して読ませていただき、農林水産業に従事する人に注力した取組であったり、目標、方向性が明確に現れていることを少し期待していた部分があるのです。

ただそういった取組の方向性として、三番目に新規就農者等の新たな担い手の確保であったり、育成という表現があったのですが、それではそこにどのような方針というか、過程だったりプロセスだったり、今回のこういう中で具体的に展示するのは難しいとは思いますが、指標に関しても具体的な数字であったり、そういったものがあまり読み取ることができなかったので、個人的にあまりわくわくしないというか、今後の10年後であったり、30年後であったりというところで、やはり新しい世代、自分もまだ若手の世代ですが、気が付いたら30年後自分たちにとっても、いろいろと考えないといけない年代になることを考えると、わくわくしない感じの部分があったように感じました。

自身が前職、農業教育機関というところに勤めていた経緯もあって、そういう部分も感じるのかもしれないのですが、私は以前、途上国を含めて海外で農業活動をしていました。

その中に JICA 青年海外協力隊として、南アジアの山岳国ブータンという国で活動していたのですが、やはり途上国という関係もあって、物であったり金であったり、情報といったものは、農業を行う上でもリソースとして欠落していたのですね。

そういったものがあつた中で、個人的にすごく助かったというか、良かった部分というのが、人によるところだった。

また人の考え方が優れるものがあって、改めて2年間の国際協力活動が充実していたように感じます。

今回のビジョンの中でも総合的なテーマとして、人づくりというのが、人材育成という点であるのは感じるのですが、その JICA での活動もそうですが、人がやはり産業においてとても大事な糧になる。

そういうことが改めて理解することができたので、ぜひ本県においても、そういったものがビジョンとして、具体的に行動目標に落とし込んでいくような流れがあると、僕自身も後々はそういった産業に携わりたいと思っている人間でもありますので、いただければという感じがあります。

またもう一点、農業と海外という点で考えると、もう一つ大きな課題というか、大きな考えないといけない点として、やはり外国人の従事者の側面。僕自身もアメリカで1年半ほど農業研修生という形で、その当時僕の方が外国人の研修生の立場にいたのですが、今現在、日本において第一次産業といわれる中で、外国人の労働者という存在は大きなものがあり、農業の中では前職でいた県、茨城県は農業分野においては多かった。

本県、広島に関しては漁業に関しては、やはり多い状況になっているというのがデータ上ありますので、そういった労働者に関して、僕自身も今後の日本の人口減少という世界を見る上では、重要な人材というか存在だと思うので、そういったものも含めた、協力しあえる関係を築きながら、一つの産業を発展する上で、どういうふうなビジョンが今後の10年、20年、30年というところであるのかなという点、考えがありましたので、こういったところも含めて、何か意見、簡単にですがお話をさせていただきました。

改めて今後につながればと思います。ありがとうございます。

湯崎知事： ありがとうございます。

農業に関連した人、それから目指す姿というのが、もう少し具体的にあるといいのではないかとということ、それから人が鍵だということ、その人には外国人というのもあるということで、まさに外国の皆さんと共生して産業づくりができればという御意見でございました。ありがとうございます。

それでは続いて、佐々木さんにお問い合わせできますでしょうか。

参加者②

佐々木： 佐々木と申します。今日はよろしくお願ひいたします。

ひろしまブランドの強化と国内外からの共感獲得ということで、お話をさせていただきたいと思います。

私は昨年千葉から尾道へ移住してまいりまして、今年の2月に尾道の商店街で夫婦でブルワリーを開業いたしました。

尾道市民になってからまだ浅いのですが、せん越ながら今日はお話させていただきます。

尾道産のレモンを使った尾道エールという商品をはじめとして、尾道で採れた農産物を生かしたクラフトビールづくりをしております。

尾道に移住して来たきっかけですが、私ども定年を2、3年後に控えて、これからの生き方を考えるようになりまして、サラリーマンを辞めて、これからはものづくりをしてみたい、自分の好きなビールを作ってみたいということで、ビールづくりをしようと思ひまして、作るのですしたら日本のどこか、できればブルワリーのないところでやりたいと思ひまして、その候補の一つが尾道市でした。

なぜ尾道にということですが、4年前にしまなみ海道をサイクリングいたしました、その際しまなみの風景とか、サイクリングの爽快感がすごく印象に残っております、尾道は印象深いまちでした。

その中でやはり一度行ったことのあるところということで、移住の相談を始めた

のですが、広島県が主催する移住フェアに参加いたしまして、その尾道市のブースで担当の方ととても話が会いました、そこがきっかけで尾道に来るようになったのですが、その担当というのが、今日もここにいらっしゃる酒井さんですが、酒井さんとクラフトビールの話で一通り盛り上がりまして、そのあといろいろと創業するならこの方に、移住ならこの方にと、いろいろな方を紹介していただいたおかげで尾道に来るようになりまして、最終的に尾道でクラフトビールをやろうと決心いたしました。

尾道市には、しまなみ海道沿いの景観とか独特な箱庭的な町並みとか、ゆったりと流れる時間、なぜここだけゆったりしているのかよく分からないのですが、それでもゆったりしている。

それから数え切れないほどの果物とか野菜とか、海の幸、山の幸いろいろな物があるのです。

この辺は調べはしたのですが、実際にこちらに来て、やはり何でこんなにみかんがおいしいのだろうとか、そういうことをすごく肌で感じています。

ここにしかないものがたくさんある尾道です。

こういったものをどんどん発信していくことが、尾道でまたは広島のブランドの向上につながっていくのではないかと思います。

あと移住してきて感じるのは、尾道に住んでいらっしゃる皆さんが尾道が大好きな方が多いのです。

それで尾道に誇りを持っていらっしゃる。

それからおせっかいなのです。

移住してきた私たちにも、気持ちのいいおせっかいをしてくださる。

このおせっかいに、とても私たちは助けられています。

このホスピタリティというのですか、こういったものは植え付けようと思っても、なかなかできるものではないと思います。

もしかしたら一番の尾道ブランドは、尾道の人たちのホスピタリティなのかなと思ったりしております。

私たちは尾道のレモンやはさくといった尾道の食材を使いながら、メイドイン尾道のクラフトビールで尾道を盛り上げたいと考えています。

地域の人と観光客の方が交流できる場を作りながら、クラフトビールを通して、広島のはまたは尾道の魅力を今後とも発信していければいいなと思って、日々ビールづくりをしています。

以上です。ありがとうございました。

湯崎知事： ありがとうございました。

移住されて人との出会いもあって尾道にいらしゃって、素晴らしいものがたくさんある。

それを御自身のビールを通して、発信をしていきたいというお話でございました。

ありがとうございます。

それでは続いて小林さん、お願いできますでしょうか。

参加者③

小林： 本日はこういった場に呼んでいただきまして、ありがとうございます。

私も実は同じく、昨年7月に東京から移住をしてきております。

尾道のしまなみ海道の瀬戸田という地域に今移住してきているのですが、その前も約1年半ぐらい前から瀬戸田には月に1回ぐらいのペースで来ておりまして、会社の事業を通して地域おこしをやってきております。

具体的には今年の春に、ソイル瀬戸田という地域と外をつなげる「街のリビングルーム」というのを一つコンセプトにした複合施設をオープンさせていただいてまして、同時に瀬戸田がより地域の人にとっても、そして観光客にとっても魅力的な場所になるように、まちづくり、まだまだそこまではいえませんが、地域おこしをさせていただいておりまして、東京から飛び込む上で、より多くの人に顔を覚えてもらうために、別に歌も歌えないですし踊れもしないですが、自称アイドルということで、もう一人実は別にいるのですが、二人で「しおまちブラザーズ」という兄弟ユニットをさせていただいて、最近だとありがたいことに、いろいろなメディアにも取り上げていただいて、変わった二人組が瀬戸田にいるということで、いろいろな方

に少しずつ注目していただけている状況です。

そういった中で一つ私から提言というか視点として、この場で提供できるかなというのが観光業の部分でして、弊社であったり、私が所属する会社でも関連会社が瀬戸田で新しく旅館を今回作りまして、そこを目がけて世界中からいろいろな観光客が来るというところで、実は瀬戸田の今の地域おこしが、近年より活発になってきているという背景もありまして、しまなみ海道の真ん中に位置する瀬戸田で観光業に携わる中で、やはり強く感じるのが、その他の県との連携の重要性なのかなと思っておりまして、とりわけこの資料の中でも、たくさんキーワードとして出てきているのが、瀬戸内エリアというワードだと思うのですが、そうなったときに瀬戸内というのは、もちろん広島県を中心に四国や岡山県とか他の県もある中で、やはり瀬戸内エリアの魅力であったり、ポテンシャルというのは今世界的にも非常に注目されてきていますし、そういったすごくいい流れがある中で、どれだけ広島県が県としてそこをリードして、具体的にどういうことかというところ、今回空港が民営化されるにあたって、かなりパワーアップするというところで、やはり一つのハブ、この瀬戸内エリアのハブにきちんとなるように、検討して後ろ盾をしていくとか、そういったところであったり、あとはロジスティクスの部分ですよね。やはり皆さん観光において、移動が一つキーワードになってくるのですが、瀬戸田にいてもすごく感じるのが、他の県との交通の部分での連携が非常に悪くて、観光客も自分でレンタカーを借りたり、何とか船とかバスで移動しているような実情でして、もう少しそこが改善してくると、結果的に瀬戸内エリアに訪れる人が増えれば増えるほど広島県全体ではないにしても、少なくとも我々がいる尾道を通る人は増えますし、それが更には、もちろん市内に行く人も増えるだろうと思っていますので、そういったところでまだまだ改善の余地があるのかなと、すごく細かい話にはなっているのですが、私的には感じているところで、そういったところになるかなと。

あともう一つ、せっかくこの場でお話できるというところというところ、私含めて我々が今、結構東京であったり外部からこの県に移ってきて、新しいことに挑戦させていただいて、それができているのも間違いなく尾道市の職員の皆さんの後ろ盾があるというところで、地域の人からすると、やはり突然外から来た人が新しいことをやり始めると、すごく恐怖心みたいなのも持たれる方がいる中で、市としてそこをバックアップして下さって、我々も地域の人となじむ時間というのを時間をかけて作ってくれていって、今後新しい取組を外だけではなくて、地域の中でしていく人も非常に増えてくる中で、安心感、今回一つのキーワードになってくると思うのですが、安心感を与えられるのって、純粋にその人の気質であったりということも大事ではあるのですが、それ以外で県であったり市が地域の人と、新しいことを取り組もうとしている人の間に立って、きちんと物事がうまくいくように調整していく、そういったことが大事になってくるのかなと思っていますので、そういった意味では、ぜひそこに関しては県としてないしは、これから市としても引き続き継続してお願いしていければなと思っています。

すみません、長くなりましたが以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

観光していく上で他県との連携、それからまさに我々も頭が痛いところなのですが、公益観光といいながら、なかなかその実現のための移動が難しい、それをどうするか。

それから挑戦する人、特に外部から来られた方あるいは地域の中で挑戦する人、そういった皆さんが安心して挑戦できるように、いろいろな反発もあるかもしれないですが、行政がある意味でいうと認知をして、バックアップをすることが重要だということだったかと思います。ありがとうございます。

それでは引き続いて中本さんお願いいたします。

参加者④

中本： こんにちは。私は中本悠哉と申します。

仕事としては保育士の仕事をしておりまして、向島、向東という地域に自分は住んでいるのですが、自分の分野の中でお話をさせていただくと、保育という部分で保育園は子供にだけの保育というわけではありませんで、地域としてという、先ほど知事

からもありましたが、地域でしっかりと子育てをしていくという尾道市により良くなっていくためにはどうしたらいいかなと、いろいろと考えてまいりました。

尾道市としてかなり子育て支援事業に関しては、力を入れてくださっておりまして、保育園、認定こども園を運営していく中でも、すごく心強い存在であります。

そんな中で、我が子のことも含めてのお話なのですが、私の妻が看護師をしておりますので、ある程度、子育てに関するものを学校で学んだ上で仕事に就くわけですが、長男を出産したときのことですが、忘れ物をしたので家に帰ったことがありまして、その際に鍵を開けて見てみると、何か妻が震えているのですね。

何かと思ったら、大きい声を出すわけではなく、ポロポロと涙を流して泣いているのです。

どうしたのかと聞いてみると、オムツも替えたし母乳もあげたのに子供が泣き止まない、どうしていいのか分からないという状況を妻から相談がありました。

実際、保育園とか認定こども園で、子育て支援の事業をしておりますと、遊びに来てくださったお父さん、お母さんからの相談が一番多いのが、育て方が分からないだったり、育児に疲れたしまったというお話が多々あります。

実際先ほども説明にあったように、ネウボラが尾道にもありまして、妊娠期から切れ目のない支援が行われていると思うのですが、うちの妻は長崎県から嫁いでまいりまして、今尾道に住んでいるのですが、結婚してすぐ、出産してすぐのときは、どうしてもうちの親を頼れなかったというのが正直なところありまして、今は実家の近くに住んでいるので、当たり前のように毎日家に行っているのですが、当時どうしていいか分からない、相談する場所がなかったというのが正直なところですよ。

自分の親に電話をして、どうしたらいいのだろうかというのを聞きながら、自宅で保育をしていたみたいなのですが、実際ネウボラという制度があって、どうしても保護者の方が赴いて行くというのが大前提になっています。

尾道もやっているのですが、保健師の全戸訪問ですね。

出産をすると数カ月後に全戸に保健師が回って来てくださるのですが、そういった部分が生まれて1回来てくださるのですが、それ以降は自分が出ていくことが前提となっている制度になってまいりますので、保育園、こども園に来ていただいて、しっかり相談していただいて遊んでいただくというのもいいかなと思うのですが、やはり行政側からも、もう少し一歩踏み込んだ支援があったら、ネウボラとしての機能が飛躍するのではないかと考えております。

安心して子供を生んで育てることができる広島県の取組といたしまして、そのような制度今後できてくるといいかなと思っております。以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

子育ては知識として持っていたとしても、実際には大変なことがいろいろとあって、それをどういうふうに支援していくかということについて御提言いただきました。ありがとうございます。

それではお待たせいたしました。最後になります酒井さん、お願いいたします。

参加者⑤

酒井： 酒井と申します。今日はよろしくお願ひします。

自己紹介も今日は軽くしながら、私がやって来たことの中で気付いたことをお話しし、せっかくの機会なので、ぜひ湯崎知事に普段の私の尾道市の活動の中から、二つほどお願いさせていただければと思います。

私自身は実は東京と尾道を行き来した、二拠点ワークをしております。

起業して広告デザイン会社をやっているのですが、起業してもう15年になり、震災のときにこっちに戻ってきました。

それなので当時、二拠点ワークというのが、今でこそトレンドになっていますが、まだやる人間はいなくて、私も向こうにはほぼ1カ月いて、1週間だけ尾道に戻るという生活、これを二拠点ワークというか、いわゆる単身赴任ですよ。

こういうことをして、ただ震災を期に世の中も地方回帰というところで、随分注目されたとは思いますが、今回のコロナで何か違ったなというのを、ここ最近考えていたのですが、やはり震災では絆とかつながりとか、そういったキーワードを含めて地方が注目されていたのですが、当時なかったのがデジタルというところ。

今回コロナ禍によって、やはりデジタルシフトが大きく動いてきて、より住みやすくなったのかなと思っています。

先ほど知事の説明の中にあった、いわゆる「適散・適集社会」のフロントランナーというところ、こういった立地を生かした地方のいいところを、まさにデジタルで補いながら、新しい働き方をするのは非常にいいことかと思っております。

そんな中で、私が10年間の東京と尾道の行き来の経験を生かして、昨年度、先ほどの佐々木さんも来ていただいたのですが、広島県の受け入れコンソーシアムという事業のコーディネートを仰せつかりました。

それでいろいろな方の、移住したいという翻訳になって、その人が求めるような生活、ライフスタイルを地域に落とし込んで、いろいろな方を紹介していったわけですが、とあるときに少し気付いたのですが、今までは移住したらそれで終わりだったのですが、移住者というのが、特に尾道の場合かなり多いので、何が起きたかという移住者の入った方の企業が、例えば東京に販路がなかったのだけれども、その方が入ったおかげで、東京に販路を広げていったとか、企業にとっても、すごくいいことがあると思ったのです。

移住者と聞くと、人口減少だけのポイントで判断されがちなのですが、これはまさに働き方改革、多様な主体の活躍によって、産業構造自体も変わって行って、より良いものになるのかなと思っています。

これは行政にとっても税収面であるとか、いろいろな面でプラスになるなど考えているときに、この移住計画を更に横つなぎのものにしていければ、もっといいものになるのかなと思っています。

そういった意味ではふるさと回帰センターが発表した、2020年の移住者希望ランキングで、昨年広島県はセミナー部門で2位、相談部門でも6位にランクインしているのです。

実は1位が長野県で、これは僕の個人的な目標で、いつかは1位になりたいとは思っているのですが、こうした状況を追い風に多様な人材の受け入れに広島県としても、ぜひ積極的に取り組んでいただきたいと。

まさにこの担当課と私も二人三脚でやっておりますので、今一つ目のお願いとしては、この移住政策をより良いものにしていくために、こういった産業の施策であるとか、横連携を増やしていただければと思っております。

続いてこの多様な人材を採るといえるか、移住者によって多様を生む必要性が何にあるかというところで、やはり先ほどからいわれる、デジタルという便利を作ることとか、クリエイティブですね感情の部分で、こういった人材が組み合わせると初めて多様化というと思うのですが、それを生むには場所が必要だと思うのです。

現在私が因島、村上海賊で有名ですが、広島県の因島に住んで主に活躍をしております。

この因島の南側、因島大橋の麓あたりに今度「渚の交番」という、日本財団と尾道市と一緒に開発を進めている事業があるのですが、そういった周辺に、実は広島県が持つキャンプ場だとか公園があるのです。

それがどうなっているかというのは、知事はなかなかお忙しい中、分からないと思うのですが、特に何もなっていないのです。

この前の災害の土砂崩れ自体は直っているのですが、ほぼ荒廃した状態で、我々も民間なのでなかなか勝手にはできない部分があり、二つ目の一つ提言というかお願いとして、先ほど行政はサポート役と言った知事の言葉に私、大変共感をしたのですが、ぜひその辺りのサポートをやっていただきたいと思っております。

私も行政的なことは分からないのですが、言えることは、なかなか県の土地になっている部分が、活用しようにもできない部分があります。

一方で私たち民間も含めて、こうしたいという県民の、民間の活動はそこにすごく集まっています。

これを何とか融合すれば、もっと大きなうねりができていき、先ほど小林さんの瀬戸田のところもありましたが、交通インフラと組み合わせれば、瀬戸内のいい政策になるのではないかと思います。

以上です。ありがとうございます。

湯崎知事： ありがとうございます。

二拠点居住、二拠点ワークをされる中で移住者の果たす役割、多様性をもたらして

くれる、産業を変えてくれるという点。それから行政と民間がもっと連携して、行政が持っている資産なども活用できるのではないかという御提言をいただきました。

どうもありがとうございました。

一通り皆さん御発言をいただきまして、本当にありがとうございました。

今日は場所柄というか観光とか移住とか、移住者で過半を占めているすごい組み合わせだなと思いましたが、尾道の強みならでは、あと観光も尾道らしい。

尾道のすごくいいところは、僕が尾道の宣伝をしてもしょうがないのですが、後で平谷市長にいっぱいしていただこうかと思いますが、そういう観光客とか移住の皆さんと、地元の日常の暮らしというのがすごく近いところであって、今尾道駅の観光施設がなくなって大変苦労しましたが、それでも商店街も地元に着しているところがたくさんあるから、何とか頑張っている、そんなところもあるとは思いますが、そこが尾道の強みかなと思います。

大橋さんは広島に来られる前に、農業学校の職員でいらっしゃったということでは大変貴重な御示唆をいただきました。

実はこのビジョンと合わせて、農業については農林水産業アクションプログラムと一緒に作ってしまして、そちらにかなり詳細にいろいろなことを書いています。

わくわくしていただけるかどうかは、読んでいただくとということなのですが、我々基本的な考えとしては農業で食べていけるという、それを実現しないと農業が持続的にならないだろうということで、それも夢っぽくいいのですが、夢っぽくいうと、なかなか目標が定まらないので、あまり夢っぽくないのですが、農業従事者の平均所得が500万円になると、そういうと身もふたもないように聞こえるでしょう。

それでもすごく大事なことで、農業に携わる人が皆さん500万円以上の収入が得られるようにする。

そうすると家族も養えるし、特に農業地域で、漁業もそうなのですが、そういう地域で生活コストも比較的少なく済むので、500万円の所得があったら結構、人間らしい暮らし、人間らしいといか、それ以下だと人間らしくないのかといわれるとあれですが、豊かな暮らしができるだろうということで、500万円というのを定めているのです。

広島県は本当に全国の中の平均、1人当たりの耕作値の面積の半分くらいしかない。

いまだに1ヘクタールとか、全国すごく増えているのですが、そういう状況なので、そういったところを改善していくことで、かなり現実的となっているかもしれません。

おっしゃるように人が鍵ですし、何といいますか地域、特に中山間地域を支える非常に重要なものだと思いますので、引き続きご支援をいただければと思います。

佐々木さんも、最初は何かすごく夢っぽい、いいですね、定年間近になって、これまでの暮らしとか仕事を全く変えて、好きなビールで地域を活性化したい。ここ一步これを踏み出すことがまさに挑戦で、それをいかに応援できるかということが、まさにビジョンなので、ビジョンを体現されている方ということです。

本当に私はうれしく思いましたし、私もビールが好きでマイクロブルワリーというのは、一時流行ったけれども、一回ほとんどなくなってしまっ、広島にもいろいろあったのです。

あったのがなくなってしまっ、第一次クラフトビールブームだったかもしれませんが、世界でもまたクラフトビールすごく伸びてきていますから、クラフトビールいろいろなところで作っていただくのは、個人的にうれしいなと思っています。

本当に佐々木さんのような活動というか仕事というか、ライフというか、混然一体なのだと思うのですが、それがまさにビジョンが目指す、仕事も暮らしも、夢や希望に挑戦できるという欲張りな状態の実現なので、引き続き、まず皆さんに夢や希望を持っていただくことが重要ですから、そこから我々もしっかりと進めていきたいと思いますし、ビール自体もブランド化だと思うのですが、実際佐々木さん御夫婦のことって、広島県の中で結構ニュースになっているじゃないですか、それが広島県のブランドにもなると思うのですね。

それが全国にも伝わって、そうすると移住者に対するブランドにもなる、ということもぜひ我々も頑張って情報発信をさせていただければと思います。

よろしくお願ひします。

小林さんも観光で、クラフトビールも観光もすごく親和性があると思うのですが、東京から来ていただいて、多様な人材の意味ということをおっしゃっていただきましたが、まさに小林さんのような方、もちろん佐々木さんもそうですが、違う視点でものを見て、瀬戸田も瀬戸田の人だけで瀬戸田のまち並みを見てみると、「ああ、廃れて残念だな」と思われたかもしれませんが、実はそのポテンシャルをしっかりと見て、世界とか日本の他のところでも比較をされて、こうした方がいいのではないかと、そういう視点をもたらせてくれる、そういう方ではないかと思ひます。

御指摘のように他県との連携は非常に重要で、海の道構想というのがありまして、「瀬戸内海の道構想」これは瀬戸内7県で、この瀬戸内をブランド化していこうと、そして広域周遊していこう。

そのために連携しようということで、これは実は広島県が提唱を始めて、もっというと私が選挙公約で最初に持ち出しまして、最初、海の道1兆円構想といって、1兆円どこにいったのだとよく怒られるのですが、7県で観光消費額1兆円目指してきました。そういうことをいっているのです。

本当に御指摘のとおりで、空港も今のコンセプトは、この地域のハブになるという。

これからまたインバウンドが戻る中で、そのインバウンドのハブになっていこうと、空港の運営会社とも話をし、役割分担をしながら進めようとしております。

ロジスティクスは、これもこれから必要なことは、デジタルとの連携というか、デジタルをどう入れて、なかなかそうはいつでも赤字の交通機関をたくさん作るわけにはいかないの、どう既存のリソースをうまく使っていくか。

例えば先ほど少し話をし、市長が瀬戸田でクルーザーをチャーターするような、そういったビジネスも見えてきているといわれましたが、船って最も悠久の資産の一つなのです。よく車がシェアリングということで、普段、車は駐車場に置いてあるだけで、ほとんど稼働していないのが課題だと。

船はもっとそうで、そういう眠っている資産をいかにうまく使うか、それはデジタルをどう使ってマッチングして、船自体は余っている。

足りないのは実は船長とかそういうことがあるので、それをどうするかとか、そういうことが重要なのではないかなと。

ここではデジタルが必要ですし、それをまた企画するという人の人材育成が必要で、そのためには、おっしゃっていただいているような多様性ですよ。

ずっと同じものを見ているのではなくて、いろいろな経験を持った人が、いろいろな角度から見てもらうということが非常に重要で、それこそ外国人も含めて、そういった目とか視点を活用していくことが大事じゃないかなと思ひます。

それに対してそういった方々が、安心してチャレンジできるようにということもおっしゃるとおりで、ある意味、親方日の丸といいますか、尾道マークをここで、ポンとここで付けたら、市も応援しているのだと、周辺の人も応援しやすくなるということだと思いますので、そこは我々もそこは意識をしながら進められればと思ひます。

そして、中本さんが、唯一の地場の、そして地場の課題についておっしゃっていただきました。

子供・子育て、この少子化の中でますます重要になってきているということで、ネウボラの在り方についても御提言をいただいたのですが、本当に我々目指すところはどうかということ、もちろんネウボラから出かけていくこともあると思うのですが、出かけていかななくても安心してもらえる。

もともとのあれとして、そういう関係を作りたいと思ひます。

相談に来て初めて安心するとか、ネウボラの人アウトリーチして初めて安心するのではなくて、そもそも行っても行かなくてもネウボラがあることで、安心できている状態を作り出したいというのが今の県の目標。

これはかなりレベルの高い目標だと思ひまして、そのためには社会システムとして、ネウボラがしっかりと定着しないといけないと思ひます。

それはどういうものに出るかということ、今7歳になる年、みんな小学校に上がりますよ。

小学校上がったときに、ほとんどの場合、学校に行かせて大丈夫かなと思ひないですよ。

むしろ学校は当たり前だし、学校に行けば安心ですよ。

あまり考えなくてもそう思っているのではないですか。

それと同じように、子供ができたならネウボラが支えてくれるから、そんなに心配する必要はないよということを、社会的に共有される意識というか、そういうものができるようにしたいと今考えています。

そのためにアウトリーチも必要かもしれませんし、もっとネウボラの、理想的には相談員の方と妊娠をしたらすぐに人的関係を作っていくことが重要ではないかと思っております。

とても子育ては重要なテーマでありますので、実際保育園を運営されていて、これからはぜひお力をいただきたいと思います。

酒井さん、ありがとうございました。

今既に申し上げましたが、移住者の方の非常に重要な、もたらしてもらえるものとして多様な視点。今日も本当にたくさん、いろいろな視点いただいていると思います。

それから今県で目指しているのは、クリエイティブ人材の集積だとか、クリエイティブ人材に移住してもらう、あるいはプロフェッショナル人材移住してもらうことで仕事を作る人。仕事を作るというのは別に起業するという意味ではないのですが、先ほどおっしゃったような、東京の販路の開拓できるとか、海外のファンの開拓できるような、何かを企画することができるとか、それによって仕事が増える。

そして雇うことができる人が増える。

そういう人を呼び込みたいというので、実はこれプロフェッショナル人材拠点事業というのがあって、広島県、全国でまず間違いなく一番なのです。

つまり一定の給与以上の方、企業で多分そういうところは代表される支所になってくるので、要するに指示されて仕事する人ではなくて、自分が仕事を作り出して、人を集めて事業を成長させることができる人。

全国で一番呼び込んでいるのは実は広島県なのです。

これはあまり対外的に目立っていないのですが、それはぜひこれからも力を入れて、やっていきたいと思います。

キャンプ場のお話もありましたが、実はこれパーク PFI という仕組みもありまして、パーク PFI みたいな大掛かりな制度がいいのかどうかというのもまたありますが、パーク PFI とかあるいはアダプト制度とか、そういうがあるので、そういうものも活用しながらおっしゃるような民間の皆さんが、ここをもっとこうしたらいいのになんかということを受け入れられるようにできたらと我々も思います。

ちなみに因島大橋のたもとのキャンプ場ですよ。

僕は行ったことはないのですが、調べたことはあるのです。

何もないという。何もないのがいいなといって、おとしぐらいに子供と2人でキャンプに行こうかと思ったのですが、それは悪天候で実現できなかったのですが、すてきになるとうれいので、ぜひよろしく願います。

今日は本当に様々な御意見いただきました。

市長、この時点でコメントとかお気づきの点ありますでしょうか。

平谷市長： 知事が新しいひろしまビジョンの中で、ひろしまブランドの強化ということで、国内外の共感の獲得という中で、尾道の場合は、私たちは尾道ブランドの強化という思いを持っているのですが、昨年度でここにいらっしゃいます佐々木さんとか、移住者の中で窓口で尾道に移住されたことがある。大体窓口を通過しての移住で85名ぐらいの方が尾道に来ていただいて、それから今の小林さんのように、ビジネスで来た人を入れると、多分100名以上の方が尾道に新しく、いろいろなことでチャレンジをしたいと来ていただいている。その中で逆にシナジー効果というか、今までとは違う流れがまさに確かに起こっている。

商店街の中しかり、それから農業分野もそう。

今のさまざまな分野でいろいろなネットワークがいたり、シェアハウスへ来ている子供たちが、デザイン分野だったりホームページを作れたり、様々な能力を持っている人たちが地場の企業の人とくっついて、地場の企業の人たちがビジネスを大きくしていく。

今佐々木さんが作られている、尾道ブルワリーの原料を大橋さんが作る。

大橋さんが作った農産物で佐々木さんがビールを作られる。

それをソイルで小林さんが売る。

これだけで地域内の循環ビジネスになってくる。

それを酒井さんが窓口でお世話をするというように、何かいろいろな外から来た人がネットワークでつながっていくという。

湯崎知事： そのお子さんを中本さんが面倒を見る。

平谷市長： そう、そのお子さんを中本さんが面倒を見る。

来られた方が出産したときの受け皿としてきちんとできるように、今尾道の場合はネウボラという言い方しないのですが、子育て支援センターぽかぽかとか、子育てセンターがデジタルでオンライン相談ができるような取組を、全てさせてもらっているところまでできているので、先ほどのように、逆にそのことがフランクに使えるような関係になるところまでなっていないことが課題なのでしょうから、そういったものを聞かせていただきながら、新しい取組につなげていきたいと思えます。

それから先ほどもそうだったのですが、交通インフラの中で最も考えていけないといけないのが、船が瀬戸内で魅力的なのに、要するに橋ができたために航路をみな止めざるを得なくなって、補償していくということで魅力的な船がなくなって、もう一度私たちはJRもそうなのですが、シースピカという船、それからラズリという船を瀬戸田に就航ということで、魅力がものすごくアップしてきている。

そういう意味で交通インフラは瀬戸内は船を新しい魅力ということで、尾道は「海の都尾道」という形になるようなものを標ぼうできたらと思っています。

実際に今日来られた人の意見を聞くだけでも、つながっていくことはできるので、今日もある方が尾道へ、自転車ショップを開いていただける方が、瀬戸田でイメージを持っているのが、自転車は船としたらヨットだと、ヨットを止める港がないかという話になったときに、瀬戸田のそれぞれにたくさんある港を、いわゆる漁港だったり地方港湾だったりするのを、新しい視点で見直すことを提案していただいたり、そういうことの営みを繰り返すことで、新しい活性化のプランが出てくるのではないかとと思っています。

そこの中では、そこにあるような人材育成ということが、それに関わる中で育ってくるということで、県が施策を貫く3つの視点というのは、全てにわたってこれからの尾道のまちづくりの柱になる内容だと思っています。

新しい尾道のまちが動き初めているというのを実感しているところですので、今日いただいた意見を大切にしながら取り組んでいきたいと思えます。

それから先ほどの酒井さんがいわれた、因島大橋の記念公園の辺りの土地は全部広島県所有なのです。また相談します。県会議員さんよろしくお願ひします。

それをいかに地元的にブランディングできるかというように活用するのも、私たちの大きな課題ですので、たまたまそれが今のように、「渚の交番」のプロジェクトとか、「しまなみビーチ」とか海に関わる内容で、そういったものを運営しようとするところと、今の小林くんなどやろうとしていることが、つながったりという形で、私たちはそういうことを県と連携して、しっかり取り組んでいきたいと思えますので、よろしくお願ひします。以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

ここから、ちょっと時間短くなってしまいましたが、全員でのディスカッションにしたいと思うのですが、これまでお話を聞かれた中で、こういうことに気付いたとか、こう思うのだけれどもとか、あるいはこれってどうなのですかという質問とかあったら、皆さんからお願いできればと思えますが、いかがでしょうか、遠慮なく。

突然のふりで、最初に言う人は勇気がいりますが。中本さんお願ひします。

中本： 失礼します。先ほど佐々木さんのほうからあったところで、僕自身がそんなに尾道に住んでいて誇りを持っているのかなと、いろいろと疑問を持っています。

あって当たり前の環境に今自分たちがいること、向島という海に囲まれて近くに山もあってという環境にいるのが当たり前だったので、あまり気付かなかったところがあると思うのですが、先ほど移住されてきた方々のお話を聞いていて、広島県民としての誇りも、もちろんあると思うのですが、私自身が今日ここにこさせていただいて、自分の一番の収穫が尾道人として、お話をいただいた内容ですごく誇りを持って、尾道だよといえろと感じましたので、すごくありがたかったなと思っております。

これからもたくさんの方に、来ていただけたらいいかなと思えます。

ありがとうございました。

湯崎知事： ありがとうございます。

そうなのですよね、地元にいると気が付かないことというのは、それに気付きを与えてくれる移住者の方は本当に大事だと思いますが、佐々木さん、今のお話を聞かれていかがですか。

佐々木： やはり地元いらっしゃる方、意外とこんなに素晴らしいものに気が付かないのだろうというところがすごくあって、例えば私は向島に住んでいまして、毎日渡船で通勤するのですが、渡船の風景が本当に大好きで、毎日幸せだなと思うのです。

それでも地元の方からだとこんな汚い船でみたいなお話で、とてももったいないなと思います。

それが最初からの風景だからということだと思うのですが、多分私みたいな目線で、首都圏とか他県の方は尾道を見ていると思うので、本当に尾道いいところなので誇りを持っていただいていると思います。

あとは子供さんの件ですが、こちらに来て思ったのが、小学生の子とか中学生の子とか、お子さんが通学の途中で、皆さん挨拶をしてくれるのです。

それが今までないことでして、前住んでいたところでは、やはり知らない人とは話さないということがあるのだと思うのですが、知らない子から「おはようございます」とか言われたことがあまりなかったのですが、こちらはすれ違う子供、子供がみんな「おはようございます」とか声をかけてくれるので、すごく素直にみんな成長しているなと思って、声をかけられるたびに、私も元気に応えているのですが、そういう意味も含めて、素敵なところだなと思っています。

湯崎知事： ありがとうございます。

何となくお二人の会話を聞いていると、ラブラブな恋人のようなお話にも聞こえますが。

子供たちが挨拶をしてくれるというのは、これは本当にある意味で適散のいいところですよね。

広島市内でもあり得ないですからね。

どちらかというと知らない人には声かけてはいけないし、声かけられても無視しなさいという。

あとはいちいち声をかけていたら、「おはようございます」「おはようございます」とずっといっていかなくてはいけないみたいな、そういうこともあって。

それが本当にできる環境が素晴らしい。

それがただ、そこにいとなかなか分からない。

渡船もピカピカ過ぎないところがいいのですよね。

風情というものなのですが。本当に地元と外の目が違う、それはそれでいいことだと思うのですが、お互いがそれを認識しあうとより良くなるということかと思えます。

その他いかがでしょうか。それでは大橋さんから小林さんでお願いします。

大橋： ありがとうございます。

僕も佐々木さんがおっしゃっているような部分と似ているのですが、やはり僕も移住者という形で来たときに、それ以前にも当然、尾道って存じていたので、また嫁もここで勤めていたというのもあって、いろいろな縁があってここに来ているのですが、僕の去年の1年間の活動の中で、いろいろいわれる中で、やっていたことの中のいくつか、今活動していることを僕からの目線で教えてくれというお話が多くて、社協の方々だったり、それこそ農家さんもそうなのですが、そういう方々に僕は、すごくここはプライドという表現をしてしまうと、町のイメージとして少し難しいのですが、誇りがいっぱいあるところですよ、いろいろと魅力的な場所ですよと伝えているところがあって、僕も尾道に来たときに、やはりちょっと温かいイメージだったのです。

御調町はしっかり四季を感じられるところだった。

四季を感じられるところは、日本にいたら当たり前と思うかも知れないのですが。

世界一つ見て四季がある存在というのは、ものすごく物の生産には適したというか、必要な要素になるのです。

今日の朝もそうだったのですが、道の駅にある野菜市で農家さんとお話をさせていただいたのですが、町内の物を町内の人が食べて生活できる。

すごく当たり前のことなのです。

日本で身土不二といわれる言葉があるのですが、地産地消という言葉もそうなのですが、体と土は二つにあらざという考え方なのですが、自分の体は、今ある土からできたもので、できあがっているという考え方なのです。

それが体現できているところ、それに近いところが、僕はある意味誇りだと思のです。

町内にやはり歴史もあって、文化もあって伝統もあって、そういったものが誇りにつながる一番の要素だと思っているのです。

そういったものが意外に町内にいる人のほうが、当たり前になり過ぎているというか、忘れがちになっている。

僕は出身が東京なのですが、両親が転勤族という関係で、いろいろな海外も含めて住んでいたこともあるので、故郷という存在であったり、日本という存在をいろいろな視野から見ていた現実もあるのですが、尾道に来てすごく生活しやすい。

御調に来てすごく生活しやすい環境だなど、僕もだんだん当たり前になってくるのかなと思いがらいるのですが、そういうことが普通にあって、そういったことを町内の人に紹介できるというか紹介する機会があって、その方々からいろいろな反響があって、よりもっと具体的に何かこういうことをしたいとか、町内の人たちが元気になって、改めて新しい動きにつながっていく素地がある環境がすごいなと感じました。

また子育てに関しても、僕も自分の嫁と移住するところ、どういうところがいいだろうと、そういう視点もあって移住させていただいて、この度、母子手帳もいただく機会がありまして、ぼかぼかにもお世話になってすごいシステムだなど、改めて機会として、こういうものがあつたのはすごく良かったと感じます。

やはり嫁も安心しますし、僕も町内でNPO法人で活動されている方々も含めて、いろいろとお話を聞かせていただいているので、そういう点は誇りにつながると思うので、尾道の人たち、もともとの地場の人たちも、もっと誇りを持っていいのかなと思っています。

湯崎知事： ありがとうございます。

小林さん続いてお願いできますか。

小林： お時間もあれだと思うので、手短かに意見というか今日の感想をですね。

やはり多様性を受け入れる環境がすごく大事で、既に尾道にはそれがあって、かつ県としても市としても、そこがすごく大事になってくるかなと。

今回のビジョンの中でも、ひろしまブランドの強化という話はあつたと思うのですが、結局ブランドというのも、一つ全体で統一された何かビジョンを掲げるのではなくて、最終的には強い個の集積なのかなと個人的には思っていて、それは地域という意味においての強い個というところもありますし、人材というところも同じなのかなと、それなので、尾道であったり他の市をイメージしたときに、皆さんが持たれているイメージ、それは良さであつて、かつ尾道の中でも島ごとに魅力があつて、それを一つずつ最大限に強く個として面白くしていくと同時に、それが最終的に気付けば、広島県はこんなに多様な場所なのだねと認識をされて、ひろしまブランドが確立されていくことになるのかなと思っていますし、人材というところにおいても、今日はたまたま移住者の人が多いですが、尾道市全体で見たときには、本当に多様な方がいらして、移住者もそうですし、地元はずっと根付いてやっていらっしゃる方もいて、いろいろな方々がいるのが、尾道市の魅力だとも思っていますので、いろいろな人達の意見が、いろいろな場所できちんと吸収されて政策であったり、あとはそれぞれの事業の中で、それが意見として反映されていくと更に面白くなっていくのではないかと思っていますし、そういったことに気付かせてくれた、こんなすてきな場所だつたと思っております。今日はありがとうございました。

湯崎知事： ありがとうございます。

大橋さんに御紹介していただいた御調の暮らし、それがまさに適散・適集というか特に適散の部分で、そういったことが今の時代に、やはり改めて価値として見いだされているというか評価されている。

もともと、例えば自然志向とか田舎志向とかそういうのはありましたが、改めて震災、コロナを経て、本当にそういう身土不二ということの価値、せつかくこれを持っている我々は更に伸ばしていく。

今御調は柿も再興され始めていて、地元の人が頑張っているらしいですが、そういった誇りを持ってできることがあるということ、それから適散の実現で、本当に素晴らしいことにつながっていくということだと思います。

今日何度も出てきた、小林さんのおっしゃっていた、多様性ですね。

地元の誇りは地元の人だけが持っているわけではなくて、その価値とか価値観に共鳴をしてくれる人が、その誇りになるものを再発見させてくれるし、またそれだけ、より愛してくれていたり、より誇りに思ってくれていたりするので、それをいかにオープンに受け入れるか、場所によっては、よそ者といわれて受け入れてくれないところもあるわけですが、また、それをいかに受け入れて力にしていくかということが、この時代に非常に求められることではないかと思います。

時間も過ぎてしまいました。今日はとてもいい話をたくさんお伺いすることができて、私もこのビジョン進めていく上でも、すごく力になるというか、皆さんまさにそれを実践していただいていると感じましたし、また今ずっとお話をお伺いしていても、やはりそれぞれの皆さんが挑戦されて、それが広島県を作っているということ、この場で改めて感じることができましたので、皆さんの挑戦がしっかりとできるように、我々も頑張りたいと思います。

それでは今日は本当にありがとうございました。

閉 会

司 会： 皆様，ありがとうございました。
これを持ちまして、「ひろしまの未来を語る in 尾道」を終了いたします。
本日は御協力いただきまして，誠にありがとうございました。